

廣———莫

富田惣七*

学問の分野はいろいろあるけれども、その根本は、やはり自然科学であろうと思います。というのは、結局自然科学は哲学と一体である。そう思っているからであります。

私の一生に恩師はたくさんおられますけれども、一番に憶いますのは、中学で落第生であった私の担任であり、この自然科学博物館の創設者であり、その初代の館長であった堀芳孝先生であります。以前この研究報告で堀先生の追悼の号が出されたときにも書きましたが、「……花は何のためのもので、その花に赤や黄色やいろいろあるのは、それは何となく分るように思いますが、その赤なら赤に、うんと白っぽいのが、幾分黄味があったのやいろいろあって、全く同じ赤というのがない。それぞれにみないろんなニュアンスをもっています。それは何故なのでしょうか……」とお尋ねしたところ、「それが判らないから植物の勉強をしているのだ」と言われたと書きましたが、この先生の言葉こそ、まさに自然科学というものを的確に把えたものだと思います。館長室にかけている天文学者藤田博士の色紙にも「宇宙は神秘」とありますが、この神秘という言葉こそ、自然というものを考えたとき(結局はそれだ)と考えられるのであります。

私は毎朝ほとんど欠かさず四時ちょっと過ぎに九十九橋の上まで行って、そこの一服場所に腰をおろし、ぼんやり東や西に遠く見える山を眺めているのですが、毎朝ながら、何時も私の心に強く迫ってくるのは——廣さ——ということであります。向うに見える西の連山、そのどの峰でもいいそこ一本の木の下に今自分が居るとして、右や左を眺めまわした時、そこにどの位の木があるだろうか。幾万本あるか、幾十万本あるか、私にはまるで見当がつきません。そしてそんな時、とんでもない——廣さ——というものが私に迫ってきます。その連山の上には美しい雲が棚びいています。東の空の明けていく明るさをうけてぼんやり浮んでいます。そしてその雲を漂よわせている空があります。先ほど書いた藤田博士の——神秘なひろい空——です。何十万光年や何百万光年どころではないひろい空です。その——広い——空の下にあるセメントの6階7階がなんと貧しげに見えることでしょう。

うろんな記憶ですが、二万光年という星が観測されたことがあったようにおぼえています。その遠さは、人間が考えて、自分の人間経験ではどうにもならない。ただその数を口にしてみるだけ、というとんでもないものであります。然しその遠さも、実際は——ほんのそこら——というに過ぎません。まだまだの遠さ——無限——という、それはもう遠さではない、それを橋の上でわたくしは、朝あけに光を弱めつつある星を頼りに感じるのであります。望遠鏡で観測してはみるが、しかしそれはつい眼の先のもので、他は永劫の彼方に輝やいている。このことは人間の頭では性格づけのなし得ないことであります。

* 福井市照手1-2-9

その距離の中に地球を置いて考えてみると、地球などは、あっても無いが同然という存在でありましょう。まして、その上に生息している無数の生物、その生物の一種である人間………というように考えていきますと、人間という生物の存在など何かすかなものではありませんか。その生物が、なんだかんだと自意識を膨脹させて、いろいろ騒ぎたて、やれハイテクだの何だのと喜んでいいるのですから、おかしげなことです。

(北里大学の奥井先生の研究によると、アフリカのマクロタームというシロアリは4 mもの高さの巣をつくり、そこに200万ものアリが住んでいるということです。そしてそのアリ達が一日に吸う酸素の総量は240リットルにもなる。謂うまでもなくその酸素がなくなれば半日で200万のアリは死んでしまう、という事です。ところがその巣の中の部屋部屋は素晴らしく空調システムが完全で、それは勿論専門業者に作ってもらったのではないマクロターム連が自分で作るのだそうです。)

こんな初めて聞く蟻の名前を出してこなくても、外圧に対して力学的に最も強い正六角形の集合体を自分の住宅にしている蜂の造営力を考えてみても、それやこれやそんな例で一ぱいであります。ファーブルの昆虫記を読んで、これは参った、と思うのは人間で、虫は呆気羅漢としています。虫だけではない、みんなそうなのです。越冬は言うには及ばず、冬の間森の鳥たちが何をしているか、地中にもぐりこんだ他のものたちはどうしているか。冷蔵庫でたべものを腐らすのはだれか。そんな事を考えて、自然が不可思議で、偉大で、底の知れない深さをもっていることを教えてくれるのは自然科学であります。

石川啄木に——一握の砂——というのがありますが、さてその一握の砂つぶを数えてみるとしたら大変です。ましてそれが三国の海岸の砂つぶということになると、そんな話はパカパカしい、となりますし、福井県の、又は日本海沿岸のとなると耳もかきません。だから砂漠をふくめた地球全体の、とでも言おうものなら、もう腹もたたない位のものです。しかしそれでもそれは有限の数なのです。簡単に無限の、と言いますが、それがどんなものか、それを考えることはちょっと無理のようです。

私たちが今しなければならぬ事の第一は、自分をとりまいて空間の広さを考えることでしょう。いろいろな状態の中で、いろいろな場面に遭遇しながら、いろいろなおどろきを通して、この——広さ——を知ることです。いや感じることです。そして人間という生物が、どれ位微細な存在のものであるかを考えることです。明治末から大正期へと——ヒューマン——人智——科学——理論——というものが、人間の足を地につけずに浮き浮きするものにしてきました。

——広さ——を見ましよう。おそらくそれが新しい出発点となるでしょう。自然科学をサイエンスという居間にとじこめないで、あの青空、あの星のきらめき、すべて私たちのぐるりをとりまき、私たちをかくあらしめているこの広大さそのものを謂うのだと考えましよう。

訃報

富田氏は、去る11月28日に逝去されました。
謹んで哀悼の意を表します。